
止まない雨、病みゆく街

淵トマト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

止まない雨、病みゆく街

【Nコード】

N8604Z

【作者名】

淵トマト

【あらすじ】

一秒につき、一歳年をとる奇病。

そんな病が蔓延した街は、緩やかに死への道を辿っていた。

人々はやがて来る死に怯え、錯乱する。

家を燃やし、人を殺し、蹂躪し尽くす。

崩れゆく街を象徴するかのように、空には鈍色の雲が覆う。

退廃した街の中、天文部に所属していた星太と衣織は歩いていく。

かつての部員を探す為に。

もう一度、星を見る為に。

プロローグ

雨が、止まない。

しとしとと、降りゆく雨は街を蝕んでいく。

アスファルトに当たるとは、小気味よい音を立てる。

地面に広がる水溜まりから、波紋が消えることは無い。

蔓延する湿気は、人々の心すら湿らせていく。

鉄で出来た建物は錆びて爛れていく。

臭気が鼻につく。

気分が、悪くなる。

「はあ……」

とぼとぼと、亡霊のように歩くこの少年も、心が錆びれてしまっ
たのかもしれない。

無気力に、怠惰に、覇気も無く生きる。

残り少ない生を、ただ息をするだけで過ごす。

それだけで良いだろうと少年は思った。

考えることすら億劫だった。

なのに、彼は今動いている。

同じ年齢の少女に手を引かれて。

「もつとしゃきしゃき歩きなさいよ。見てることちまで暗くなる
じゃない」

薄暗い街には不釣合な金色の髪が光る。

外灯も壊れ、大概の店は閉店し、薄い霧が覆う道に、光を灯すよ
うに明るい少女。

「何処に行こうが誰もいないよ。なのに何処に行こうって言うん
だ」

だが、手を引かれる少年はそれとは対照的だった。

言動に比例するような暗く、短い黒髪が特徴的だ。

いや、それしか特徴が無いとも言えた。

「まだ、誰かが生き残ってるかもしれないでしょ。諦めるのはまだ早いわよ」

「生き残ってたとしても何も出来ないし変わらないだろ」

「本当に星太は卑屈よね、名前に謝らないといけないんじゃないの？」

「うるさいな、僕だって好きでこんな名前になったんじゃないよ。星太と呼ばれた少年は、道の端にある溝を見て溜息を吐く。

そこには人が横たわっていた。恐らく死んでいるだろう。

けれど、今更驚きはしない。

死体など、もう見慣れたからだ。

突如蔓延した奇病によって、街の殆どの人間は死んだ。

そのせいで死人の供養すらろくにできない。

屍がそこいらに転がっている場所もある。

火葬場など機能してはいなかった。

いや、街だけでは無く、国もだ。

日本という国は、既に崩壊しているに等しい。

御陰で外部との連絡すら取れない。

もしかすると、ここは隔離されているのかもしれないし、閉鎖されているのかもしれない。

けれど、それを確かめる術は無い。

暫く歩くと、少女の家の前に着く。

表札には「水瀬」と書かれていた。

「なあ、一回休憩していこうぜお前んちでさ」

「そうね、一度入りましょうか」

引き戸を引いて家に入る。

現代には割と珍しく、木造の家だ。

廊下を歩き、居間にある冷蔵庫を開ける。

何処で汲んだのかも分からない水が入っていた。

星太は断りを入れてからその水を飲む。

「……不味いな」

濁ったような、腐ったような味。

けれど、文句は言えない。

飲めるだけでも感謝すべきなのだろう。

「そういえばさ、お前の家に赤ちゃんいたじゃん。えーっと……
青ちゃんだっけ」

「ああ、いたわよ」

「今は、どうしてんの？」

「……いるわよ」

そう言って少女は部屋を変える。

星太は黙って付いていく。

その間に会話は無かった。

障子を開けると、小さな部屋の真ん中に何かいた。

雨音が外から薄く聞こえる。

星太はそれに近づき、拾い上げる。

「青……ちゃん」

手に抱えられたしわくちゃんなもの。

それは来年、三歳になる幼児だった。

老衰で死んだかのようにしわくちゃで、枯れているようだった。

この国に蔓延している奇病。

発症すると、急激に老化が始まる病。

その早さ、一秒で一歳。

恐らく、この幼児は発症してから一分半程で死に至ったのだろう。
早すぎる死。

けれど、星太は悲しいとは思わなかった。

これが普通なのだ。

皆、同じように死んだ。

そして、恐らく自分たちもいつか死ぬのだろう。

そう考えると、何も感情が湧いてこない。

ああ、一足早く逝きやがったな。

それぐらいしか思わない。

多分、思考が麻痺してしまったのだろうと思った。

毎日毎日、同じような死体を見てきたから、見慣れたのだろう。この家には、もうこの少女しかいない。

水瀬の性を持つのはこの少女、水瀬衣織だけだ。

それもいつか枯れるのだろう。

「ねえ星太、あんたの家は……」

「死んだよ、あつさり逝った」

兄も両親も、皆等しく干からびて死んだ。

秒針が時を刻む毎に顔を歪め、命乞いをしながら枯れていった。

あつさりと、無惨に生を終えた。

その時も星太はただ呆然と見ていた。

余りにも現実離れした光景だった。

血が出るわけでもなく、痛みを感じるわけでも無い。

一分足らずで訪れる死。

余韻に浸る暇すら無かった。

「天文部の皆はどうなのかな」

ふと、衣織は呟いた。

街がこんなになる前、星太たちは部活動に属していた。

部員四人のこじんまりとした部。

それが、星太の居場所だった。

今となっては、とても懐かしい。

「さあ……生きてるのかな」

今となっては分からない。

けれど、星太は皆に会いたかったと思った。

「見に行ってみようか」

手にもった幼児の屍を丁寧に供養してから、言った。

「うん、そうね……行きましよう」

衣織は頷く。

衣織の家を出て、空を見上げる。

依然、雨は上がらない。

鉛色の雲が、空を覆っていた。

青だけが広がる空を最後に見たのは、いつだっただろうか。
星太はそんなことを思った。

「これじゃ、天体観測も出来やしないな」
星など見えない空を見る。

そもそも、明日の生死すら見ることが出来ない。

「そうね、これじゃ星……見えないわね」

残念そうに言ってから、二人は歩き出す。

かつての輝かしい日々の残骸を見るために。

一章

「あたしさ、水希の家知らないんだけど」

水溜まりを踏み、飛沫を飛ばしながら衣織は言った。

「は？ 僕も知らないぞ」

「何で四人しかいない部員の住んでる家も知らないのよ……」

「いや、部活で一緒にいるだけで事足りたからな」

衣織は軽く溜息をつく。

坂道を登る足取りが、止まる。

呆れたような表情で、上から衣織は星太を見た。

「あんたつてさ、そういう目で誰かを見たこととか無いの？」

「そういう目、とは？」

星太には衣織の言っている意味が良く理解できない。

「天文部つてあんた以外全員女の子だったじゃない」

「え、衣織は女だったのか」

次の瞬間、紺色のジャージに包まれた衣織の蹴りが星太の脛に直撃する。

「痛つてーな！ 冗談だよ、冗談！」

「笑えない冗談は止めてよね。思わず蹴りそうになっちゃったじゃないの」

「お前、本当にそう思っただけなら病院行った方が良いで。夢遊病の恐れがある」

「冗談よ、冗談」

「全く、笑えない冗談は止めるよな……」

星太は視線を外す。

道の両側に付いている溝からは、水が溢れ出している。

溢れ出た水は、死人の体液と混じって腐ったようだ。

異様な臭気が立ち込めている。

それが輪を掛けて星太の気分を悪くする。

「見たことねえよ、そんな風になんてさ」

「へえ、そうなの」

「ああ、変に誰かに関わっちゃったら部の空気が悪くなるかもしれないだろ？」

「意外に色々考えてたのね、あんたも」

「悪かったな、考えてて」

天文部は、星太以外の部員は全員女性だ。

衣織、水希、葉子。

それに星太を含めて、晴れて部員が全て揃う。

「葉子の家は知ってるのか？」

その問いに衣織は頷く。

どうやらそれは把握しているらしい。

「なら、そっちから回ろう」

「そうね」

星太の視界の上がちかちかと光る。

壊れかけた外灯が最後の力を振り絞るように点滅していた。

住宅街に入ると、臭気が増した。

「うつ……こりゃ酷いな」

家を五軒跨ぐ間に、二人の亡骸を確認した。

一人は干からびて、皺くちやになっっている。

もう一人は眉間に刃物で刺されたような後があった。

これは病では無いなと星太は思った。

残り少ない死期を前にして、錯乱した誰かに殺されたのだろう。

無数に、とは言えないが、割と有りうる話だ。

警察など、この街では機能しちやいない。

奇病が蔓延し始めた頃は酷かった。

所々の店が荒らされ、蹂躪しつくされた。

死を前にした人々の狂気は恐ろしい。

それを嫌という程、星太は目にしてきた。

親友の翔太も、そんな連中に殺された一人だ。

死んだ翔太の顔は、生前の端正な顔立ちが嘘のように、顔面が正確に判別できないほど歪んでいた。

死の街、というのがこの場所には相応しいのかもしれない。

何もかもが狂っている。

「僕も、狂ってるんだろう」

そう呟いた声は雨音にかき消された。

こんな死を待つだけの街で、思い出を掘り返す為だけに生死も分からない者を探す。

なんて馬鹿げた話なんだろう。

けれど、それに付き合う衣織も大概狂っている。

「相変わらず大きいわね、葉子の家は」

葉子の家の前に着く。

高級住宅街に鎮座しているだけあって、家はそこいらの家よりも一回り大きい。

庭があつて、高級そうな外車が止まっている、が外車は所々にへこみが見られた。

多分、誰かが鈍器で打撃を加えたのだろうなと星太は思った。

これでは、家主の命が無事かも怪しい。

インターホンを鳴らして間も無く、高く透き通るような声が聞こえた。

紛れも無く岩峰葉子の声だった。

「葉子！ あたしよあたし」

「誰……ですか？」

「あたしだつて、あたし！」

「おい、名乗れよ。おれおれ詐欺みたいじゃないか」

「あ、そうね、衣織よ」

インターホンごしに、息を飲む音が聞こえた。

「衣織……ちゃん！？」

「星太もいるわよ」

葉子は驚いているようだった。

無理もない。

かつての仲間がまだ生存している上に、訪問してきたのだから。

「どうぞ、遠慮しないでください」

玄関に通される。

純金の招き猫が出迎えてくれた。

ブランド物の靴が綺麗に揃えられている。

だが、どれだけ金があつて裕福でも、命は買えない。

「……おお」

星太は思わず感嘆の声を漏らす。

久しぶりに見る葉子は、やっぱり綺麗だった。

温和で、何事にも動じずにいられる芯の通った女性。

編まれた髪が、横髪として垂れている。

それでも尚、余りある艶やかな玄のような黒髪は、後頭部付近にまで伸びている。

一目見た印象は、清楚で謙虚。

けれど、胸に秘められた二つの果実だけは、隠せないほどの存在感を誇示していた。

「近所の人も、皆亡くなつてしまつて、とても不安だったんですけど……お二人が来てくれて良かったです」

「そうか……やっぱりこの辺りもほぼ全滅だったんだな」

「……ということは星太さんの周りも？」

黙つて星太は頷く。

場には重い空気が流れた。

均衡を破つたのは衣織だった。

「ま、まああたしたちはまだ生きてるんだしさ、悲観しなくても良いと思うけど」

「うふふ……衣織ちゃんは相変わらずですね」
嬉しそくに笑う葉子。

昔の日々を思い出しているのかもしれない。

星太も、少し懐かしい気持ちに包まれた。

「葉子の家族は……どうなんだ」

思わず聞いていた。

無礼だと、無神経だとは分かっていた。

けれど、麻痺している星太には流れ出る言葉を止めることが出来なかった。

こほんと小さく咳をしてから、葉子は言った。

「私は、両親は駄目だったんですけど、まだ弟が生きていてくれるからそんなに悲観してはいないですよ」

「そうなのか、ならまだ良い方だ」

既に身内が数人死んでいても、誰か一人でも肉親がいるのなら御の字だろう。

「お姉ちゃん！ この人たち、誰？」

広々とした、品のある廊下を駆けてくる少年。

小学生ぐらいだろうか、無垢な瞳が印象的だ。

「この人たちはね、ほら、天文部の……。前に言わなかったかしら」

「ああ！」

少年は納得したようだ。

「あねがおせわになっております」

ぺこりと頭を下げる少年。

中々どうして礼儀正しい。

「流石、坊っちゃんよね」

感心したように衣織は言う。

「お前より礼儀良いよな」

平手打ちが星太の頬を襲った。

頬が赤く腫れる。

「弟の優です」

温和な表情を浮かべて、葉子は弟を紹介する。

「可愛い子だな」

優はとてとてと葉子の元へと走りより、抱きついた。

それを優しく抱きしめる葉子。

「はい、私の心の支えなんです」

星太は腰を低くして、優に話しかける。

「お父さんとお母さんがいなくて、寂しくないのか？」

「うん、最初は凄く悲しかったけど、僕にはお姉ちゃんがいるから」

「そうか、強いな」

優の頭を撫でる。

弟がいたらこんな感じなのかと星太は思った。

「そういえばさ、葉子。水希の家の場所、分かる？」

「水希さんですか？ 分かります……けど、多分お家にはいらっ
しやらないと思いますよ」

「どういうことだ？」

星太は問う。

頭を過ぎる、様々な可能性。

そのどれもが、外れていることを願う。

「何だか、今でも学校の屋上にいるそうなんです。そのせいで
余り家に帰らないとか聞きました……」

星太は思わず苦笑する。

それに呼応するように衣織も溜息をついた。

「相変わらずだな」

「そうね」

そこまで言って、二人は腰を上げる。

「ちよつと見に行ってくる」

「屋上にですか？」

星太は頷く。

依然、雨音が外から聞こえてくる。

「私は、優に何かあるといけませんので……」

「うん、弟さんの側にいてあげて」

衣織は無邪気に笑う。

二人は大丈夫だろうと思った。

互いが支えになっっているのなら、何とかやっていけるだろう。

「じゃ、行くな」

玄関を開けて、外に出る。

向かうのは学校の屋上だ。

そこは、天文部の活動拠点。

懐かしさが、込み上げてくる。

星太は一步踏み出して、衣織を見た。

「熱心に活動している部長を、冷かしに行くか」

薄く、衣織は笑みを浮かべた。

「そうね、行きましようか」

二章

罫が校舎の壁を這っている。

所々がくすんでいて、お世辞にも綺麗とはいえない築五十数年の校舎。

鈍色の雲が晴れたとしても、決して汚さは変わらないだろう。

ここが、星太たちの学び舎だ。

「懐かしいな」

しみじみと感慨に浸る星太。

「いや、あたしたちはまだ生徒だからね」

とは言っても、この騒ぎの中では二度と通うことにはならないだろう。

三学年、三百数名の生徒の内、大半の生徒はもう、校舎を見ることにすら叶わない。

校門を潜ってすぐにグラウンドが広がっている。

放課後には運動部が猛々しく走り回っていたものだ。

しかし、今のグラウンドは雨によってぐちゃぐちゃになっていた。ゼリー状になった泥が、進行を阻む。

踏み入れた足を呑み込む。

「もう、二度とグラウンドは使えないだろうな」

「いや、あんた文化部だから使わないでしょ」

「体育では使うかもしれないだろ」

「いつも保健室でさぼってたじゃん」

「そうでした」

校舎に入ると、靴箱が出迎える。

放置されたままの上靴が並んでいた。

もう二度と、履かれることはないだろう。

湿気ていて、埃臭い。

「えーっと、屋上はどこから出るんだっけ」

「確か、本館からだったような気がするわ」

星太の通っている高校は、三つの館から成っている。

北館と南館、それに屋上に出れる本館。

本館の二階に上がった時、衣織は足を止める。

「ねえ、ちよつと寄つていけない？」

衣織が指さしたのは教室。

かつて、星太と衣織が属していたクラスだ。

水希と葉子も、クラスメートだった。

「そうだな、寄つてくか」

立て付けの怪しい扉を開ける。

少し力強く押せば、倒れてしまいそうだ。

教室に入つてすぐ、星太の顔が歪む。

「はは……酷えな」

乾いた笑いを浮かべる星太。

机が等間隔に並べられ、綺麗な黒板があつたはずの教室の姿は、

無い。

机も、椅子も地震に襲われたかのように散乱し、黒板には穴が空

いている。

窪みの形跡からして、椅子が何かで殴打されたのだろう。

木の部分が剥き出しになっていた。

罅が這っている壁に飛び散るのは血。

乾いて色褪せてはいたが、確かに血痕だった。

「ねえ、星太、あれ……」

教室の端に、ぽつんと横たわる何か。

近づいて見てみると、それは死体だった。

奇病に侵されている上に、顔が殴打されていて誰だか判別するこ

とも出来ない。

生徒なのか、教師なのか、はたまたそれ以外の誰かなのか、窺い

知ることは出来ない。

「何処だよこ……」

思わずそう漏らしてしまう程、二人の中にある教室の記憶とは結びつかない。

まるで別世界に足を踏み入れたようだ。

ここは、かつての賑わっていた教室では無い。

うるさいほどの笑い声も、チャイムの音も、聞こえない。

今はただ、雨音が虚しく響くだけだ。

「このままさ……あたしたちがここに来なかったら、この人、誰にも見つけてもらえなかったのよね」

不意に、衣織がそう呟いた。

その横顔には、哀愁が含まれているように見えた。

「あたしたちもさ、死んじゃったらさ……誰からも忘れられて、誰にも見つけられずに死んじゃうのかしら」

唐突に、衣織は言った。

いつもの明るい彼女では無いように見えた。

いつか来る死に、怯えているのだろうか。

「怖いのか……?」

「当たり前でしょ。自分が生きた証が、何もかも無くなるんだから」

なら、と言って星太は黒板にチョークを走らせる。

小気味いい音を立てて、文字が描かれていく。

『天文部：水瀬衣織』

決して綺麗とは言えない字で、続けて書く。

『天文部：影山星太』

書き終えて、手を払う。

チョークの白い粉が宙に舞う。

「こうすれば、名前だけは残せるだろ。ほら、生きた証だよ。まあ、気休めなただけだよ」

衣織は黒板の字を見て、笑う。

「下手な字ね」

「悪かったな」

衣織は教室を一足先に出る。

踵を返し、星太を見て言った。

「でも、汚くは無いわ」

「そうかい」

チヨークを床に投げ捨てる。

白の破片が、飛び散った。

星太も追って教室を出る。

黒板には、二人の名前が大きく刻まれていた。

三章

雨に打たれても、少女は学校で一番高い場所から望遠鏡を覗き続けた。

星も、空も見えないけれど。

少女は飽きることなく空を眺めた。

もしかすると、雲の向こうにある、星を見ているのかもしれない。けれど、その手は微かに震えていた。

寒さからなのか、恐怖からなのかは分からない。

でも、彼女は空を眺めるのを止めない。

視線は、遙か先を見据えている。

星を眺めたまま、彼女は息絶えるのかもしれない。

そう思わせるほどの異常な執着心。

「相変わらずだな」

星太は屋上に出る扉を開けて、言った。

相も変わらず雨が降り続くのを見て、苦々しい顔になる。

「そうね、こんな状況なのに……」

衣織は懐かしさを感じた。

人が次々と死んで、街は退廃していく。

降りゆく雨は、雲を呼び寄せ、空を覆う。

人々は皆、空では無く、地を見続ける。

星など見ることは出来ない。

コンクリートの床が、雨に濡れて光沢を放っていた。

それでも天文部部长、大空水希は天を仰ぐ。

それは、昔と何ら変わらない光景だ。

星太も、安堵する。

変わらないものは、ここにあったんだと。

しかし、そんな希望は無惨に散りゆくことになる。

星太はおもむろに近づいていく。

落下防止用の、鉄で出来た柵から空を見る水希に歩み寄っていく。歩を進めることに、ぴちゃぴちゃと水が跳ねる。

「部長、久しぶりだな」

そう、声を掛けるが水希は応答しない。

望遠鏡をのぞき込んだまま、微動だにしない。

雨音にかき消されたのかと思い、星太はもう一度呼びかける。

「おい、部長」

それでも、水希は答えない。

死んでいるのかと思うほどに動かない。

訝しみながらも、星太は水希の肩に触れようとする。

「!?!」

その瞬間、視界が空を映し出す。

何が起こっているのか理解できないまま、背中がコンクリートに

叩きつけられる。

水の飛沫が舞って、激痛が走る。

視界に星が見えた。

「星太?!」

星太の元へ駆け寄ろうとする衣織。

「動かないで貰おうか」

冷たい目で、水希は衣織を制する。

余りの威圧感に、衣織は動けない。

歯噛みしながら傍観することしか出来ない。

「痛っ……!」

痛みが治まらない。

自分が投げられたのだと気づいた時には、水希が上から星太を見

下ろしていた。

「何の……つもりだよ」

「久しぶりだね、星太」

淡々とした口調は、昔の水希のままだ。

今の状況では、それが恐怖を駆り立てる。

「ふざけんな……！ 何が久しぶりだよ」

星太の瞳は、敵意に満ちていた。
場に緊張感が走る。

だが、水希の涼し気な目は揺るがない。

「ふふ……そんなに怒らなくても良いだろう」
抑揚の無い声。

機械が読み上げていくような口調は、何処か恐怖を感じさせる。
目の前の人物は、以前の水希とは何か違った。

「水希！ あんた、何でそんなことを！
衣織はやつとのこととで声を絞り出す。」

薄く茶色がかった髪から水滴を滴らせながら、水希は鼻で笑った。
「何で、か……それはね、衣織」

星太の額に突きつけられた、黒く光るもの。

「おい……お前、何考えてんだよ」
それは、拳銃だった。

艶やかな黒、偽物とは思えない。
水希の顔を見る。

瞳は真剣そのものだ。

「ここで君に問いたい。最大限に生き残りたいのなら、どうする
のが得策か」

唐突に投げかけられた問いに星太は戸惑う。
「……！？」

「答えなよ、星太。私は答えを待つてるんだ」
額にぐりぐりと銃口が当てられる。

心が抉られていくように、怖い。
拳銃の冷たさが、背中を這うようだ。

「……そんな答えは存在しない。奇病に感染した時点で、死ぬん
だから。結局は運だろ」

一度、軽く頷いてから水希は口を開く。

「そうだね、それはそうなんだけど……。奇病にかかる以外でだ

よ

答えなければ、引き金が引かれる。

星太は知っていた。

水希は、やると言ったらやる女だ。

沈黙を貫けば、待つのは死だ。

眉間に銃弾がぶち込まれ、噴水のように血の雨が舞う。

その血が、コンクリートを浸す雨水と混ざり合い、歪な色になる。想像しただけでも恐ろしい。

「ずっと、家に引きこもってる。誰の干渉も受けずに、一人で

水希はふふんと鼻を鳴らす。

「それも一種の正解だ。人と関わらないというのは、死ぬ確率を減らすことが出来るからね」

でも、と言ってから水希は続ける。

「答えを教えてあげるよ」

星太の瞳が萎縮する。

水希の口元が、吊り上がる。

引き金が 引かれる。

雨音を切り裂くような銃声。

一瞬、音が消えた。

銃口から流れ出る硝煙。

それは大気に溶けていく。

「……！」

星太の背後のコンクリートに、銃弾は撃ち込まれた。

衣織は余りの衝撃に口を開くことが出来ない。

喉元を締められたかのように、言葉が止まる。

「答えはね、追い詰められた時に、如何に簡単に人を殺せるか、だよ」

冷酷なつり目。

そこにかつての水希の姿は無い。

彼女は、狂気に染められていた。

「お前は……何を言っているんだ」

「わたしはね、死ぬわけにはいかないんだ。最後まで、この街で最後の一人になるまで生き残っていたい」

「最後の一人……？」

水希は屋上から、街を一望する。

「そうだよ、最後まで、一秒でも長く生き続けて星を見る」
再び、水希は上空に視線を寄越す。

しかし、銃口は真つ直ぐと星太を見据えていた。

「だからね、私は生きる為に殺すよ。危害を加えられる前に、何の躊躇いも無く引き金を引く。長生きする為には、躊躇しちゃう駄目だ。この手を血に濡らしても、動揺してはいけない」

「何で、何であたしたちが!? あたしたちはあんたに危害なんて加えない……」

言葉を撃ち抜くように、銃声が響く。

引き金に絡められた指が、屈伸した。

「君たちが、死を前に錯乱する可能性も否めないだろう？」

「そんな……ことない」

力無くうなだれる衣織。

悲しげに顔を伏せる。

変わってしまった部長への思いなのだろう。

頬を伝うのは、雨か、涙か。

「今なら逃がしてあげるよ、同じ部活だったよしみだ」

そう言って、水希は二人に背を向けた。

無言の圧力。

警告のようにも思える。

力いっぱい歯軋りしてから、抑揚のない声で、星太は言った。

「行こう、衣織」

水希に一瞥もくれないことなく、星太は衣織を引っ張っていく。

「待って星太! 黙って引き下がるって言うの!？」

星太は何も答えない。

無言で屋上を後にし、階段を降りていく。

「星太、あんた……」

階段に、染みが出る。

星太の頬に、涙が伝っていた。

悔しくて、憎くて。

奇病は、人の命だけでなく精神まで喰らい尽くしていく。

水希を変えたのは、紛れも無く奇病だ。

奇病がもたらす恐怖だ。

「ふざけやがって……！」

星太は震えていた。

恐怖ではなく、憤怒で。

思い出も、絆も全てを壊したこの街を、憎む。

「必ず、正気に返らせてやるよ。絶対にもう一度、皆で揃って星を眺めてやるよ」

「星太……！」

星太の瞳に、光が戻った。

無気力だった星太は、闘志を燃やす。

校門を潜り、再び雨の中を歩いていく。

雨は未だ、止むことは無い。

四章

騒がしい教室の中。

皆が思い思いに雑談に興じる。

晴れ晴れとした青空が、窓の外に広がる。

枯れた木々が、次の花を咲かせるために、着々と準備を始めている。

黒板には何やら難しげな数式が羅列されている。

その中でも、彼は一人浮いていた。

星太は無気力な少年だった。

机に突っ伏して、死んだように動かない。

目を閉じて、暗闇の中で音だけを拾う。

四方八方から飛び交う声は、さながら不協和音のようだ。

決して、友達がいないわけでは無い。

けれど、星太は動かないし、話そうともしない。

彼自身が、必要以上に人と関わりたいと思わなかったからだ。

鼓膜を伝う、笑い声。

陽気で、快活な声。

多分、あの声は水瀬衣織だろうなと星太は思った。

誰にでも分け隔てなく接することから、衣織は友人は多い。

衣織は輝いていた。

星みたいだな、と星太は思った。

ふと、顔を上げてみる。

視界の端に、ふと映る人影。

教室の端で分厚い天体関係の本を読んでいるのは、大空水希。

クラスでは変わり者と呼ばれているし、星太も変わった奴だと思っていた。

天体に異常なまでの興味を示すが、学業も群を抜いて優秀。

賢い奴ほど変わっている、を地で行く人物だった。

「もうこれ、消しちゃっていいんですよね？」
周りに問いながら黒板に書かれた字を消しているのは、岩峰葉子だ。

その端正な容姿から、男女問わず好かれている人物。
温和で、植物のようにまったりとしていた。

星太は再び顔を伏せる。

世界は、面白くない。

狭くて、窮屈で、退屈だ。

全てが、色褪せて見えた。

空も、雲も、人も。

皆同等に、灰色に見えた。

衣織のように誰とでも仲良く出来れば、世界が楽しく思えたのか
もしれない。

水希のように偏屈なら、世界を別な角度で見ることが出来たのか
もしれない。

葉子のように温和なら、世界がもっと優しく見えたのかもしれな
い。

けれど、星太には何も無い。

特徴なんて、何も無い。

だから、面白く無かった。

人付き合いも、勉強も、生きること。

ただ、時間を貪った。

時間に流されるように、生きた。

多分、死ぬまで自分は冷めたままなのだろうと星太は漠然と悟っ
ていた。

しかしある時、そんな日々に変化が生じた。

「ねえ、あんたさ、ずっと寝てるけど……大丈夫？」

疎ましげに顔を上げると、衣織が席の前にいた。

「ああ、大丈夫だ。だから放っておいてくれると嬉しい」

そう言ってまた、顔を伏せる星太。

全く興味を示さない。

「そうはいつてもねえ……何かあんた凄い面白くなさそうな顔してるから気になるのよね」

「こういう顔なんだ。放っておいてくれ」

「どうかしたんですか？」

無垢な笑顔を浮かべながら葉子が近づいてくる。

「いや、影山が凄くつまらなそうにしてるから気になっただけ」

「だからこういう面なんだって」

「それは違うな」

分厚い本を閉じて、水希は横から会話に割り込む。

ぱたんと本が閉じる音に呼応するように、周囲の生徒たちは、物珍しそうにこちらを見る。

その視線が刺さるようで、星太は不愉快だった。

「君は刺激を求めているんじゃないか？ 私にはそう見えたが」

凶星だったので星太は驚く。

「どうやら、水希は本ばかり読んでいる訳でもないらしい。」

「凶星、という顔だな。中々面白いね、君は」

愉快そうに笑う水希を見て、星太は少し苛立つ。

普段はもの難しそうな面を崩さないの、少々驚きもした。

「君も、一度屋上に来ればいいさ。もしかすると、君の悩みなん

て吹き飛んでしまうかもしれないよ」

言い終わって、水希は再び分厚い本に目をやる。

それっきり会話に加わろうとはしなかった。

「だってさ、影山君。どうする？」

「さあね」

曖昧に答えてから、星太は顔を伏せる。

「私は影山君が来てくれたら嬉しいですよ？ 水希さんは多分、

影山君を気に入ってるみたいですし」

透き通るような声で、葉子は言う。

星太にしてみれば、そんなことはどうでも良かった。

水希と関わると、好奇の目に晒されるから嫌ですらある。

「あ、そういえば葉子も天文部だっけ」

「そうですねよ、部員は二人だけですけどね」

「へえ、今日は活動するの？」

興味津々といった様子で衣織は聞く。

「はい、しますよ。良ければ来てみますか？」

そうねえ、と少し迷ってから「影山君と一緒に行くわ」と元気いっぱいに言った。

思わず、星太は勢い良く顔を上げる。

言葉を発する暇もなく「決定ね」と衣織は笑った。

放課後になり、急いで逃げ帰ろうとする星太の肩を、衣織は笑顔で引き止める。

「夜まで星は見えないんだからさ、それまで雑談でもしましょう

よ

「いや、ちよつと用事が……」

肩を掴む力が強くなる。

ぎりぎりど、指が肩にくい込んでいく。

「雑談しましょ？」

「……はい」

嫌々、適当な椅子に腰掛ける。

教室には誰の姿も無く、席はがら空きだ。

窓の外から、運動部の声が響いてくる。

夕陽が、教室に射し込んで影を作る。

衣織は椅子に反対向きに座った。

「でさ、何であんなにつまんなそうにしてたわけ？」

唐突に聞かれて、星太は戸惑う。

何か誤魔化そうと考えるが、衣織の真っ直ぐとした瞳からは逃れられないと観念する。

「僕にはさ、個性が無いんだよ」

衣織は目を丸くする。

「個性が……無い？」

星太はこくりと頷く。

何故、そんなことを話したのだろうと思った。

言ったところで何が変わるわけでもない。

しかし、不思議と口に出ていた。

「明るいとか、変わってるとか、賢いとか、そんなのが一切無いんだ。いつか友達に言われたんだよ。お前は個性のない面白みの無い人間だって」

少しの間、場が沈黙する。

沈黙を破るように衣織が口を開いた時、笑顔では無く、真剣な表情だった。

「それはさ、その友達が悪いよ」

きっぱりと、衣織は言い切った。

予想だにしていなかった答えに、星太は面食らう。

「個性ってのはさ、皆にあるものなの。個性が無いっていうのは、その人のことをちゃんと知ろうとしなかっただけ」

「知ろうと……しない」

個性は誰にでもある。

それは、冷め切った星太に差し伸べられた、光だ。

個性なんて、自分でも分からないけれど。

「見つかるのかな……個性って奴がさ」

ふふんと、衣織は笑った。

「探せば良いよ。天文部に入っつて、人と接することで見つけていけばいいじゃない。私も、手助けぐらいは出来るかもしれないわよ」

目の前で饒舌に話していく衣織を見て、星太は疑問を抱く。

「水瀬は……何でそこまで」

「あたしもね、昔、そんな風に思ってた時期があったから。後、

水瀬じゃなくて衣織で良いよ、星太」

「そうか、よろしくな衣織」

「ふふ、あんた目が変わったわよ」

日が沈み、暗闇が校舎を包むまで二人は話した。
星太は、久しぶりに笑った気がした。

五章

衣織の携帯電話が、震える。

どうやら、電話が掛かっかけてきているらしい。

雑談に興じていた二人は顔を見合わせた。

いつのまにか、日が沈んでいる。

教室の中も、肌寒くなっていた。

「あら、葉子だわ」

通話ボタンを押し、衣織は話し始める。

その間、星太はぼーっと何も書かれていない黒板を眺める。

教卓の後ろに佇むその存在感は大きい。

磨き抜かれた黒板は艶さえ出ている。

チヨークの粉一つ付いてはいない。

そういえば磨いていたのは岩峰葉子だったか。

彼女も天文部に所属していると言っていた。

あの美貌に星の煌めきが加われば、鬼に金棒だろう。

これで家事が万全なら天下無双だと星太は思った。

窓越しに外を見る。

真っ暗で、何も見ることが出来ない。

まだ時計の針は真下を指し示しているのに、だ。

やはり冬場は日が沈むのが早い。

「さて、行くわよ星太」

どうやら話は終わったようだ。

衣織が先導して、屋上へと上がっていく。

廊下には誰もいない。

蛍光灯がちかちらと光を放っている。

どこから入ってきたのか分からないが、八工が光に導かれて舞っている。

黒い点が光の上を飛び交う。

夜の校舎は人がいないだけあって、音がよく響く。階段を登る音ですら、耳に突き刺さるようだ。肌寒い、が星太は帰りたいとは思わなかった。「着いた、けどあんたが最初に開けなさいよ」本館の四階。

この目の前の扉を潜れば、そこは屋上だ。手を伸ばして、ドアノブを掴む。

冷たい鉄の感触が伝わってくる。

身を切るような冷たさが、背筋を撫でる。

がちゃという音を立て、風が吹き込んでくる。

寒風が、頬を通り抜ける。

前は一面暗闇だ。

しかし、慣れてくるとある程度は見えるだろう。

一步、前に踏み出す。

そして、ふと上を見上げた。

「す………凄い」

広がるのは満面の星空。

澄んだ凍てつく空気が、五臓六腑に染み渡る。

黒のキャンパスに、これでもかというほど星が散りばめられている。

どこまでも、どこまでも続く無窮の星たち。

余りの広大さに、星太は息を呑んだ。

色褪せた世界に、色が戻ってくる。

空は黒では無く、光によって青を孕んでいるようにも見えた。

しっかりと、星は輝いている。

世界は狭くななんてないし、つまらなくもない。

心が踊ってくる。

興奮が治まらない。

けれど、動くことは出来ない。

瞳は、その極上の景色を離そうとしない。

「ふふん、驚いたようだね」

いつの間にか、星太の前には水希が立っていた。

「ここは割と街の光があるからこの程度しか見えないんだが……。田舎の方に行けばもつと凄いものが見れる」

「これよりも……凄いもの」

「君も、星の魅力に取り憑かれたのかな？」

無言で星太は首を振った。

満足そうに水希は笑う。

「そうだろうさうだろう、無理もない。この夜空の前では、何もかもがちっばけに思えてくるのだから」

「ああ……凄いよ」

水希は、天を仰ぐ。

手を大きく広げて、星を仰ぐ。

星が全て、水希の胸に降り注いできそうだ。

「わたしはな、いつまでもこの空と共にありたい。出来ることなら、星を目に焼き付けたまま死にたいと思ってる」

それも悪くないと思った。

この満点の宝石群を視界に入れて死ねるのなら、悪くないと。悔いが残らずに、逝けるのではないかと。

あの天に還るのなら、悪くない。

「なあ……僕も、この星を見ても良いのかな。死ぬまで、見ていてもいいのかな」

ふっ、と笑って水希は言った。

「勿論だとも、あの無窮の星たちは、決して何びとたりとも拒みはしないだろうさ」

「ようこそ、天文部へ」

暗闇の中から、葉子が姿を現す。

手にはお茶が握られていた。

湯気を立ち上らせている。

「どうぞ、部員第四号の影山星太さん」

星太はお茶を受け取り、その熱水を喉に流し込む。焼けるような熱さが、腹の中に広がっていく。

「そういえば……僕が、三号？」
辺りを見回す。

水希、葉子、星太。

そう見ても三人しかいない。

まさか、星が四人目の部員だと言うまい。

「あたしがいるじゃないの。水瀬衣織ちゃんがね」

「お前も……入部するの？」

そういえば、衣織は部活に属していなかったことを思い出す。

「ええ、この星を見てたら入りたくなったのよ。別にあんたが気になるとかじゃないから勘違いしないでね」

「はは……分かってんよ」

星太は手を差し出す。

冷たい空気が蔓延する中で、その暖かい手が触れた。

衣織の手と、触れ合う。

衣織は、満面の笑みを浮かべる。

金色の髪と、白い歯が暗闇の中で浮いていた。

確かに、天文部は四人いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8604z/>

止まない雨、病みゆく街

2012年1月2日06時48分発行